

# オペラ Opera 16

2012.3

JAPANESE ASSOCIATION OF OCCUPATIONAL THERAPISTS

(社) 日本作業療法士協会 広報誌

## 【対談】

### あきらめない、がんばらない

鎌田 實 諏訪中央病院名誉院長

中村春基 日本作業療法士協会会長

## ●子どもの発達支援

「ちょっと気になる子」を  
地域で支え合う

## ●大玉村のサロン活動

行政と作業療法士がタッグを組んで  
地域に根づく

## ●NPO 那須フロンティア

病気や障害のある人もない人も  
ともに暮らすまちづくり







中村春基 Haruki Nakamura

僕たちは、在宅でケアを必要としている人たちがいるはずだと思って、診てまわりました。その後も、石巻市に僕たちのJIM・NET（日本・イラク・メディカルネット）の看護師が2人常駐して、在宅をずっとまわっていました。そうすると、奥さんを失って家を流されたひとり暮らしの中年の男性などが、かなり孤立感を強めている。お年寄りたちは、機能が使われないためにどんどん低下している。そういう人たちをどうやって支えていくのか、といった問題

**会長** 被災地をまわられていて、作業療法の役割をどのように感じられますか。

**鎌田** 20世紀最大の精神医学者といわれるフロイトが、「働く場がある人と愛する人がいる人は、どんな困難な状況におちいても生き抜ける」と言っています。でも、お年寄りや障害がある人は、なかなか働く場がありません。働くことに代わる

**鎌田** 今回の震災は、傷がひどくて、深く、広範囲です。これから長い長い闘いになります。特に福島は、地震と津波に加えて、見えない放射能の問題があります。

震災から3週目に石巻市に入ったとき、DMAT（災害派遣医療チーム）はものすごく充実していました。医療を専門とする医師と看護師でいち早く5人1組ほどのチームをつくって、宮城と岩手にはあふれるほどたくさんのお急ぎ医療医たちが入っていたのです。

でも、弱い人、本当にケアを必要としている人や介護している人は、

声を出していないのです。たとえば南相馬市では、原発から22キロぐらいのところで、できたら逃げたかったのに、親孝行な息子さんたちは、寝たきりのお婆ちゃんを放っておけなくて、自宅に残っていました。

もうひとつは別の形で、お婆ちゃんから「私がいたら足手まといになるから、孫を連れて逃げなさい」と言われて、息子さんたちは逃げた。たぶん泣きながらおにぎりを握ったと思うけど、枕元にはおにぎりがいっぱい置いてあって、お婆ちゃんはそれを少しずつ食べて生きながらえていました。癌の末期の患者さんも、

3週間も4週間も痛みに震えていました。入浴サービスも訪問看護もデイスサービスもみんな途絶えていて、放っておかれたために床ずれだらけになっているお年寄りたちもいました。

僕は、救急医療医たちのすばやい行動などは大変評価していますが、救急医療を専門にする人たちを8割ぐらいにして、2割ぐらいは生活支援のことがわかる専門家、つまり在宅医療をやっている医師とか看護師とか作業療法士や理学療法士が入る必要を痛感しました。そうしていたら、すでに脳卒中を起こしていて体育館に避難している人の悪化などを、早期に防ぐことができたはずなんです。

後まわしにされればされるほど、立ち直りの時間がかかり、それが原因で立ち直れなくなったりすることもあ

が報告されました。それで、諏訪中央病院の院長に相談したら、「うちの作業療法士や理学療法士たちも行きたいと言っている」ということで、派遣してもらいました。

多くの子どもが津波に流されて亡くなった大川小学校から数百メートル離れたところに、地区の診療所があります。そこも流されました。久しぶりに医師や看護師が入り、さらに作業療法士や理学療法士が来だしてから、その集落は元気になるっていいんです。それまでは眠れないと言われたら、僕たちはつい睡眠薬などで対応してしまいます。作業療法士や理学療法士が入ってくると、体を動かして腰が痛いのをなんとかしているうちに、昼間動くようになって夜眠れるようになるというように、好循環が生まれていったのです。

**楽しい作業療法が、仮設住宅を明るくする**



対談

## あきらめない、がんばらない

長年にわたって地域医療に携わるかたわら、チェルノブイリやイラクの医療支援にも取り組んできた鎌田實さん。東日本大震災でも、いち早く医療支援にかけつけた。日本作業療法士協会会長・中村春基が諏訪中央病院を訪ね、被災地支援と作業療法の役割などについて話を聞いた。

**相手の身になって、「自分だったら」と考えて**

**会長** 長年、地域医療に携わってこられて、常に心がけたことは何でしょうか。

**鎌田** 37年前に東京から諏訪中央病院に来て、寝たきり老人とはじめて出会ったときは、すごいショックでした。往診に行くと、「先生が来てくれて」と言葉では家族は喜んでくれるけど、あまりお役に立っていないという実態も感じていました。命の助け方は医学部の教授から教わったのですが、生かされた命がかならずしも「生きていてよかった」と思

鎌田 實 Minoru Kamata

1948年、東京生まれ。  
1974年、諏訪中央病院（長野県茅野市）に赴任。  
その後、同病院院長を経て、現在、名誉院長。  
日本チェルノブイリ連帯基金（JCF）理事長、日本・イラク・メディカルネット（JIM-NET）代表。  
『がんばらない』、『あきらめない』、『なぜださない』、『たった1つ変わればうまくいく』（集英社）、『ウェットな資本主義』（日本経済新聞出版社）、『「がんばらない」を生きる』（中央公論新社）など、著書多数。

Photo/ 関大介

っていないようだったのです。

そして、「自分が寝たきりになったら、うちの奥さんは僕の介護を何年でもできるだろうか」と、介護する側の人のことも考えてみたんです。それを頭に描きながら、1週間のうちまる1日僕の面倒をみないですむ日ができたら、結構、続けられるのではないかという発想から、全国ではじめて身体障害がある人の老人デイケアを試みました。癌の末期の患者さんについても、「自分が癌の末期になったらどうしてもらいたいか」と思いながら、緩和ケア病棟をつくっていったんです。

今回の震災でも、最初に福島に入って、3週目に石巻市に巡回診療に入りました。そうしたら、ほとんどの人がまだお風呂に入っていないと言います。自分が被災していたら何をしてもらいたいかと考えると、体育館に寝ていて3週間も風呂に入っていないのは耐えられないだろうなと思って、「千人風呂プロジェクト」を立ち上げたのです。

なにごととも相手の身になって、「自分だったら」と考えて、医療に携わってきたように思います。

**被災地は、生活支援のできる専門家を求めている**

**会長** 医療支援をされて強く感じられたのは、どんなことでしょうか。





諏訪中央病院の食堂からは、八ヶ岳が一望できる



ものが作業療法なんです。軽い障害があるお年寄りでも、体を動かしながら作業療法を通して何かやることによって、誰かのためになることが実感できるようにになると、ものすごく元気が出てくるんです。

石巻の「千人風呂プロジェクト」には、被災者2万人の人たちが入ってくれました。そのとき、体育館に避難している人を、給料としては安ければ2カ月は生きていけると考えるよりも、金額は少なくても働きたした人は、自分の生活の将来を考えることができれば、どうやって被災地に雇用を

つくり出すかということが大きな問題だし、お年寄りとか障害を持つている人たちにすれば、それに代わるものは作業療法だと思うんです。だから、作業療法士たちが前面に出て被災地に展開していったら、もっと窮地をしのぐことができるのではないのでしょうか。その作業療法も、ただ訓練をしていくよりは、楽しいことをしながら気分転換ができていくようなものだ、仮設住宅がずいぶん明るくなるのではないかと感じます。

### 命と健康を守るには、生活・収入・仕事・絆が大切

会長 被災地を継続的に支援していくうえで、求められるのは、どんなことでしょうか。

鎌田 4月に飯館村に入ったとき、農業をやっているおじさんが、こんなことを言ってくれました。

「多くの学者は、命と健康が大事だと強調しすぎる。でも、鎌田先生はNHKテレビの『あさイチ』で、命と健康が大事だが、それを守るには、生活と収入と仕事と絆が大事だと言ってくれた。俺たち被災者は、命と健康は大事だとわかりすぎるほどわかっていて、飯館村にいるべきじゃないと思うながら、じゃ、どうやって食っていけばいいのかと悩んでいる。それなのに、いろんな人たちが

ら、なぜ飯館村に残っているんだと言われて、すごく辛かった」

人間にとって、働くということは、単なる収入だけではなく、生きていくうえですごく大きな意味があるんです。だから僕は、命と健康を守ろうとしたら、働くということを絶対に忘れてはいけない。そのことをちゃんとやっておかないと、被災者は耐えられないだろうな、と当初から思っていたのです。

さらに、飯館村のおじさんは、「だけど、鎌田先生もわかってないことがある。それは絆だ」と言います。「俺たちは田んぼを守るために、水をいっぱい引きたい。だから、喧嘩にならないように、みんなのところにどうやって平等に水を引くかを、長い時間をかけて絆を結び合いながら、信頼関係を積んできたんだ。この土地から出ていくことは、その絆を失うことなんだ」

僕は、チェルノブイリ原発事故の医療支援に20年間かかわってきて、放射能によって地域が壊され人間の生活が壊れていくのを、ずっと見てきました。当初より、命と健康と生活と収入と仕事と絆が大事だと言いつたけれど、もうひとつおじさんが言うように絆です。中心は命だけど、命が生きているには、絆も収入も生活も全部大事だということを考えてあげないと、きちつとした支援にはならないのではないかと、僕は思っている。

るんです。

### 「がんばらなくてもいいんだよ」と寄り添う

会長 先生は、ずっと「がんばらない」と言ってこられましたけど……。

鎌田 作業療法のトレーニング自体は、やっぱり「がんばる」だと思っんです。だけど時々、発想の転換が必要になります。

たとえば、動かない右手足をなんとか動けるようにしようとトレーニングします。でも、右手の動きがここでストップかなと思われるときには、「じゃあ左手があるじゃないか」と、左手を使ってその人らしく生きられないだろうかという哲学が、作業療法にはあります。どうしたらその人がその人らしく生きられるかと考えたときに、時には「左手があるじゃないか」という発想の転換をしないといけないで、それができるプロフェッショナルは、作業療法士ではないかと思っています。

もうひとつは、長期戦ですからマラソンと同じで、がんばらない時間を上手につくって、大事なときにがんばることが必要なんです。作業療法をしていくときも、障害の程度や神経のダメージによって、成果があらがないときはあります。だから、がんばる作業療法士ほど、見限りも早くなくなってしまいがちです。だけど、

る作業療法士がいてくれたら、救われる患者さんも出てきて、そこから成果が出たりするのではないかと思っています。作業療法は楽しさとながっています。そのことを忘れてしまつて、まるで修行のように思っている作業療法士もいます。「楽しくて何が悪いんだ」と、開き直ったほうがいいですね。

### 37年前の反省——「生活と密着しない医療は何の役にも立たない」

会長 先生にとって作業療法の「原点」のようなものは？

鎌田 37年前に脳卒中で意識のない患者さんが運ばれてきて、必死に治療して退院できるまでに回復しました。そのころは作業療法士も理学療法士もいなかったのですが、看護師や僕たちがやる見様見真似のリハビリテーションで、杖をつけば歩けるまでになりました。僕は「助けた」と思っただけです。退院するとき病院の玄関まで見送りに行くと、そのおじいちゃんは「先生、助けてくれてありがとう」と泣きながら言ってくれました。

その1週間後に、杖をついて歩いているおじいちゃんを見かけました。声をかけようとしたら、僕をにらみつけて「なんで助けた、殺してくれりゃよかったのに」と、怒っているんです。おじいちゃんは「俺は、

ずっと農業をやりながら生活してきました。家に帰ってすぐに自分の畑を見に行ったら、雑草が生えていた。ちよつとも草取りをしておこうと思つて、屈もうとしたら屈めなかった」と、言います。

片麻痺<sup>かたまひ</sup>を起こしていて屈むのは、結構むずかしい姿勢です。この時はじめて、おじいちゃんは「雑草も取れないのか」と気づかされるのです。

よく考えれば、入院している間に、「じいちゃんは助かったら何をやりたいんだ」とか、「じいちゃんの生きがいは何なんだ」と、僕は一度も聞いていないのです。大学の教授からは、「医者、助かった命が何をしたいのかちゃんと考えてあげるんですよ」なんて教えてくれなかったんです。それは僕にとって非常にショックだったし、勉強になったんです。生活と密着しない医療は何の役にも立たない、と思っただけです。

僕は37年前に反省をし、医療の中では生活の視点が大事なんだということ、そのおじいちゃんから教え込まれたのです。

### もうすぐ死ぬとわかっていても、リハビリは「辛いけれど、楽しい」

会長 先生のお話は、医療がどこに立つべきかという、根本的な立ち位置にかかわることだ、と思いますね。

鎌田 患者さんは、医療のために生

きているのではないですね。医療もまた、長生き競争の応援をしているわけではなくて、その人がその人らしく生きるためにあります。だとすれば、作業療法の力はずっと発揮されたほうがいいですね。

僕は、毎週火曜日に緩和ケア病棟を回診していますが、かならずそこで作業療法士や理学療法士と出会います。癌の末期でもうすぐ死ぬということが、本人もまわりの誰もがわかっていてる中の治療ですが、すごく喜ばれているんです。

あるお婆さんから、「リハビリが辛い」と言われました。何を言っても大丈夫な明るい人なので、僕が「もうすぐ死ぬとわかってるのに、辛いならやめちゃえばいいじゃん」と言ったら、「先生、辛いんだけど、これが楽しみで、楽しみで」と答えるのです。近々死ぬとわかっていても、今日より明日というように、ちよつともよくなくていくのが嬉しいのです。自分でトイレに行けるようになれば嬉しいし、トイレに行けたら庭に出たいと思うし、庭に出れたら家に帰れないのだから、うか、となるんです。患者さんにとって、もう一回家に帰ることは大事なテーマになるのです。そうやって人間の命は守られているのです。

(これは、2011年12月に行った対談を編集部でまとめたものです)



## 寺村清美さん

江田島市福祉保健部  
主任保健師



作業療法士の方に、保健師への技術面での指導とともに、お母さん方へのサポートもしていただき、私たちがどのように子どもに関わればよいか、からだで理解できるようになりました。

遊びの中で子どもとの関わり方を教えられ、「この子のせいではない。この子に無理をさせていた私の関わり方を変えよう」と、お母さんが心身ともに変わっていく姿は、生き生きしていました。そして、子どもが楽しんでいる姿を目の当たりにして、「みんなで遊んでいる時の元気いっぱいのこの子の笑顔が忘れられない」と、子育てに元気をもって帰っていくお母さんたち……。

そんなふうにして、感覚を伸ばすためには、「子どもが楽しいと思えることが一番よ」と、遊びを通した支援方法をお母さんたちに話せるようになりました。

## 畠藤邦子さん

江田島市教育委員会事務局  
主任指導主事



ひと昔前は、「先生の言うことを聞けない子」とくられていましたが、今は「発達に課題がある子」と考えられるようになり、その子をどのように支援するかが、学校現場でも問われるようになりました。

この間、作業療法士の方から教えていただく中で、子どもたちの感覚を育てていかなければならないと意識するようになりました。子どもや保護者を「そっと陰から支えてあげる」とも言われ、ちょっとだけ支援して応援することの大切さも教えてもらったように思います。

「お遊び会」などを通して、その子に関わるみんなで共通理解をはかることで、その子に対する支援の方法が一貫したものになると実感しています。それが、その子の発達を応援するうえでとても大切だということが、教職員や保育士にも理解されつつある、と思っています。



病院で診断してもらおうには言いにくい「ちょっと気になる子」。小学校入学の時期を迎えて「この子は、新しい環境に適應できるだろうか」「先生に理解してもらえないだろうか」と、不安をつのらせる保護者たち。就学前から子どもの発達の個性に気づいてはいるが、保護者や関係者にどのように伝えていけばいいのか悩む保健師。

子どもをとりまく生活環境が大きく変化するとともに、こうしたケースが増している。だが、それに適應する制度はほとんど整っていない。

### 専門職が連携し、気軽に楽しく参加できる場づくり

そんななか、子どもの発達支援にかかわる専門職が連携し、地域のニーズに適應しようとする取り組みが、広島県・江田島市で始まっている。教育委員会は、就学指導の中から「発達に課題のある子」への支援の必要性を感じていた。福祉保健部は、乳幼児健診の結果「ちょっと気になる子」のその後の支援体制を整える課題をかかえていた。教育委員会と福祉保健部が同じ建物の中にあることもあって、連携はしやすかった。そこに、広島大学と県立広島大学で教鞭をとる作業療法士たちが加わり、新しい連携の姿が生まれていった。

そこで始まったのが、月に1回の

フォローアップ教室の充実。これは遊びなどを通じて、子どもの行動の中からそれぞれの特性をつかみ、親子を支援するとともに、実施者が支援スキルを習得するものである。

特に配慮したのは、近くに専門機関や児童デイサービスなどの支援の場がないことや、長期の受診（利用）待ちになっていることを考え、親が悩みをかかえている時は1回だけの参加でもできるようにしたこと。また、氣になることがあれば専門家のアドバイスを直接受けられるように、できるだけ気軽に参加できるようにしたこと。そして、声をかけられた子が「特別な子」というイメージを持たれないようにすること。これらに加えて、教室参加が持続するためにも、保護者どうしが誘い合って参加できるようにするためにも、「楽しい」ということを大切にすること。

### 遊びの中から、その子への支援の方法を見つけ出す

その総仕上げが、就学前の3月に2日間かけて体育館で行う「研修会」と「お遊び会」（写真）。対象になるのは、入学目前の年長児で「ちょっと気になる子」のうち保護者が参加を希望した子たち。初日は、まず、参加する保護者、保育士、小学校の教員、ボランティアスタッフ（主に作業療法を学ぶ学生）などに対して、作業療法士から遊びが子どもにとつ

てどんなに大切かについて研修する。さらに「ミニお遊び会」で、大人自身が実際に身体を動かす感覚などを体験する。その後、グループに分かれて、作業療法の活動分析の手法などを使得「どのような身体の使い方をしたか」「言葉はどれくらい必要だったか」を話し合い、それをグループで発表したりまとめたりする。

2日目の午前は、子どもたちが参加する「お遊び会」。それぞれの特性に應じてグループ分けされた子たちに対応したプログラムとともに、段ボールなどの身近なものでつくった遊び道具が用意されている。作業療法士たちはチームになり、担当の子どもの様子を観察したり、遊びを応援したりする。

午後は、作業療法士が、保護者・教員・保育士とともに、個々の子どもたちの特性を話し合い、就学後ど



のように応援していったらよいかを確認していく。このようないきなり組みを通して、小学校の教員は、どんな子が入学してくるかを実際に理解でき、その子を応援する手がかりを得て帰ることになる。子どもたちには、「学校に行ったら、あの時一緒に遊んだ先生がいる」という安心材料ができる。保護者は、さまざまな助言を受けることで、不安が安心感に変わっていく。取り組みは、まだ始まったばかり。作業療法士が行政や教育現場などで働く機会が増えれば、「ちょっと気になる子」を当たり前のよう地域で支援していく場面は、格段にひろがっていくにちがいない。

取材協力／土田玲子（県立広島大学保健福祉学部作業療法学科・教授）石附智奈美（広島大学大学院保健学研究科・講師）





# 行政と作業療法士が タッグを組んで地域に根づく

ここは、福島県・安達太良山<sup>あだたらやま</sup>の裾野にひろがる大玉村。  
10年ほど前から介護予防のためのサロン活動などに力を入れ、  
村の行政サイドからの豊かな企画力とも相まって、  
大きな成果をあげている。大玉村健康福祉課の高齢福祉係長である  
神野藤浩<sup>ふしひろ</sup>さんから貴重な話をうかがうことができた。

## 平成14年から始まった サロン活動

地区の集会場に足を踏み入れたとたん、大きな笑い声が跳ね返ってきた。十数人のお年寄りが、神野藤さんの指導のもとで元気に身体を動かしている（写真）。このように、お茶飲み会、秋の芋煮会、春の花見会のような近所のお年寄りが集まる場で、楽しみながら身体を動かしたり、栄養や健康の話などをするのがサロン活動である。

お年寄りが閉じこもらないようにできるし、ちよつとおシヤレをして歩いていくことにもなるし、自慢の漬物などを持っていきたくもなるし、見守りにもなるのがサロン活動。その場で「あの人このごろ調子が悪いみたい」という情報が入れば、地域

包括支援センターから保健師がただちに様子をみにいくことができる。運動機能の維持や認知症予防にもつながる。

大玉村では、介護保険法の一部改正にともなって介護予防サービスが始まる平成18年より4年も前に、社会福祉協議会のもとでこうした取り組みが始まっている。サロン活動は、現在、月に1回、村内15カ所で行われている。また、元気なお年寄りによる老人クラブ活動も活発に行われている。

神野藤さんは語る。「65歳以上の方のうち15%が介護保険サービスを受けています。残り85%のうちの10%の方がその境目にいます。その人たちは、介護保険にいくのか、医療で対応するのか、それとも普段の生活の中で支障を取り除くことに力を

た成果は、着実に出ています。

## 地域に出ていく 作業療法士への期待

大玉村では、行政サイドで地域をみて、住民が何を求めているかを知り、十数年前からそこに作業療法士が加わることが求められ、両者がタッグを組んで地域に根ざす取り組みがなされてきた。

一方作業療法士にとって、この活動は試行錯誤の連続だったようだ。まず、住民たちの参加意欲を引き出すために、面白おかしく笑いの絶えない場をつくらなければならぬ。笑いそのものが健康のために大切な要素であるとともに、参加する住民は、病院などのように、「自分の支障を治したい」というより、「役場から呼ばれたから来た」と思っている面が強いからである。

また、さまざまな遊びの動きの中から、足腰の動きや認知面で戸惑いを示す人をピンポイントで見つけ、その場で判断して家でできるようにリハビリテーションのプログラムをつくることも求められる。しかも、ほかにフォローしてくれる人はいないので、自分で判断しなければならぬ。それだけに、地域に出ていく



かんのとうひろかつ  
神野藤浩<sup>ふしひろ</sup>さん  
大玉村役場健康福祉課高齢福祉係長

Photo/ 関幸貴

入れるのか、こうした振り分けが大切になります。その際、たとえば膝が痛い場合、どんな時に痛いのか、どのような工夫をすれば負担をなくして生活できるのかということになると、作業療法士のような専門職でないとわかりません。私たちでは、膝が痛ければガマンして動かさないように、というような発想しかできないのです」

## 生活機能支援員制度で 作業療法士とタイアップ

村ではさまざまな工夫をこらしているが、そのひとつに「大玉村生活機能支援員」という制度がある。その都度、外から専門家に講師を依頼するのではなく、また村として雇用するのではなく、委託契約した専門

ことで、得がたい経験の中から作業療法士そのものが育てられるのである。

「うちの村で住民の要望が多いのは、どこかの患部を治すというより、農作業をするうえで支障になる動きをなんとかしたい、普段の生活での足腰の負担を少なくしたいというもの。そのため、住民に意欲をもたせ、生活面にスポットを当てられる作業療法士の働きは欠かせません。大小の集まりだけでなく、個々の人ともかわって、その人の指導マニュアルや評価表をつくってもらい、事前研究もしてもらっています。保健師が地区割りをもっているように、ずっと同じ作業療法士に地域にかかわってもらえれば、高齢者も安心できると思います」と神野藤さん。意欲をもって地域に出ていく作業療法士への期待は限りなく高い。

## サロン活動

おたがいに顔の見える地域づくり・関係づくりを目的に、社会福祉協議会が全国で「地域の茶の間」として取り組んでいる小地域福祉活動。





遠藤真史さん  
地域生活支援センター「ゆずり葉」施設長・作業療法士

益子農園で農業実習



子どもたちのケーキづくりも地域交流のひとつ



\*

接客の練習にいそむホリデーのメンバーとスタッフ



ボランティアスタッフを交えた運営会議



# 病気や障害のある人もない人も ともに暮らすまちづくり



\*

JR東北本線黒磯駅から5分ほど歩くと、「ホリデー」という素敵な喫茶店に出会う。コーヒーはもちろんスイーツもなかなかの評判だ。味、接客サービス、店の雰囲気、どれをとっても一級品。ほかと違うのは、作業療法士がそこで働いていることぐらいだろうか。

## 病院や施設と 地域の生活をつなぐ

ホリデーは、近所の人たちや観光客が憩う喫茶店であるとともに、就労支援事業所でもある。ここを運営するのは、「那須フロンティア」というNPO法人で、このほか地域生活支援センター「ゆずり葉」を運営し、シンポジウムの開催やボランティアの育成などにも力を入れている。12名の有給スタッフのうち3名が作業療法士、4名が精神保健福祉士で、そのほか多くのボランティアが活動している。「メンタルヘルスを中心としたまちづくり」をめざし、病院や施設と地域の生活をつないでいる。サービスを利用できるのは、栃木県北部の那須町、那須塩原市、大田原市の住民。

## 地域とのつながりで 就労移行支援

那須フロンティアが取り組んでいることの一つに、就労移行支援がある。ホリデーを利用するメンバー（通所者）は、主に精神疾患や発達障害をかかえる方たち。メンバーは、2年間、作業療法士のもとで喫茶店の業務やお菓子づくりをしながら仕事や生活の訓練をして、就職の道をさぐる。そこで欠かせないのが、地域との

つながりとなる。メンバーもスタッフも、日常的にまちに買い物に出かけて挨拶するとともに、黒磯駅前活性化のためのイベントなどには積極的に参加している。商店街の方々と一緒に体を動かしていると自然に人と人との会話が生まれ、おたがいの理解も深まっていく。すると、「うちで実習してみないか」と声がかかるようになる。農家、コインランドリー、精米店、製麺店など、さまざまな職種から声がかかり、作業療法士も同行して仕事を体験する。

## 保健師とともに訪問支援

二つめに、精神科病院での治療中断や未治療の方への訪問支援がある。このケースでは、住民からの苦情が民生委員に入ることが多い。そして市や町の福祉課などを通して保健師に相談が届き、作業療法士も一緒に訪問支援することになる。まちの事情を詳しく知る保健師と相談しながら、定期的に訪問して話し相手になったり、「ちょっと出てきませんか」とホリデーに誘ったりして、病気は

あっても生活に支障のないように支援していくのである。

また、地域自立支援協議会のケア部会を月に1回もち、病院や施設の関係者、行政の担当者、保健師、作業療法士などが受けた相談を通して市や町の課題をおたがいに共有し、必要とされるサービスの内容や量について整理する。時には民生委員の方に参加してもらい、まわりから寄せられる苦情などを一人で抱え込まないように支援する。

## 「地域力」で退院促進

三つめに、精神科病院に入院している方の退院促進がある。症状が安定し、受け入れ条件さえ整えば退院できる患者さんは多い。だが、その声のほとんどは病院の中にとどま

ていて、地域の中にあまり届いていない。しかも、グループホームはほぼ常に満床。アパートの保証人がいないために住居が確保できず、それだけで退院できない方もたくさんいる。その一方、空きアパートをかかえる大家さんも多いというミスマッチが生じている。ここで発揮されるのが、那須フロンティアの「地域力」。両者をつなぐ仲介役になって、住居の貸し手と借り手の確保という「両得」に結びつけていくのである。

## まちに溶け込み、 支援を家庭に届ける

ゆずり葉は、病気や障害の有無にかかわらず、幅広く相談を受けている。そのため広い窓口を持っています。

年間およそ300名が利用し、うち4割が統合失調症の方々である。年齢層は、二十代、三十代の比較的若い人が多い。

最近力を入れているのは、高次脳機能障害のグループ活動。それぞれの自宅からゆずり葉までの通所手段を確保するとともに、なるべく訪問することで支援を家庭に届けるように努めている。

以前ホリデーで働いていて、ケーキづくりもお手のものの遠藤真史さんは、次のように語る。

「ホリデーがあることで、私たちは地域とつながることができています。私たちは、あくまでも『通過点』です。保健師さんいろいろな教えてもらったり、ほかの施設や行政の担当者となつたり、商店街の方々の世話話になったりしながら、そのネットワークの力で、前に進んでいるようにしています。また、『精神疾患について、わかってください』と声高に構えるのではなく、作業を通して『その人』を理解してもらうようにしています。作業療法士は、その人の生活の中心を見つけて動機づけに生かしたり、医療と障害を広くみることのできる専門職です。だれもが関わるメンタルヘルスの相談を窓口にして、まちづくりの中にさらに溶け込んでいきたいと思っています」

\* Photo/関大介





例えば：お箸を使うこと。

そしてもし：あなたの利き手が不自由だったら…。

うまくできたり、できなかったり。

うれしかったり、がっかりしたり。

お箸を使うという「作業」一つとってみても、それは、こころとからだの複雑な関係をとおして実現されています。

作業療法は、その人が生き活きたした生活を送れるよう、仕事、遊び、日常生活行為などさまざまな「作業」をとおして、こころとからだを元気にするリハビリテーション。

そんなリハビリテーションの

国家資格をもつ専門家が、「作業療法士」です。

その人その人の人生に寄り添い、障害と折り合いをつけながら創る、より良い今とこれからの生活。

作業療法士は、その豊かな生活づくりをお手伝いします。

ひとは作業をするとき、  
心は元気になる。



社団法人

日本作業療法士協会

Japanese Association of Occupational Therapists

[www.jaot.or.jp](http://www.jaot.or.jp)